

第10回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成29年4月28日（金）

13:30～16:00

場 所 サンラポーむらくも 祥雲の間

1 会長あいさつ

本日は、年度初め、連休前のお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

約2週間前になりますが、大学入学希望者学力評価テスト、いわゆる新テストについて新聞報道がございました。報道となると何故か、例えば民間のTOEFLや英検を使うことになりますとか、数学や国語で記述式の問題を何問入れるので試験時間が何分延びますとか、あるいはその採点を業者に委託しますとか、そういった実施上の具体の変更点がどうしても強調される傾向があり、何のために、大学入試センター試験をやめて新テストを実施するのかという本質的な話は逆にあまり出てこないもので、そういう報道を見ているとがっかりするときがございます。いずれにしても、現在の中学3年生、彼らが高校3年生になる4年後には新しいテストが実施されることとなります。また、このような流れと合わさって、現在の中学2年生が高校生になるときには新しい学習指導要領が先行実施される。そういった全体の流れを受けての、県立高校の在り方を検討する委員会ということになっております。

昨年度から、鋭意、皆さんにはご検討をいただいております。本日の資料5には、昨年度からどういう歩みをしてきたかが表になっていまして、これまで9回の委員会を開催いたしました。その途中で浜田市や江津市との意見交流、それから、2月には、飯南高校、島根中央高校の視察にも行かせていただき、その後の検討も重ねてまいりました。後からご説明があらうかと思いますが、今年度内に、私どもの意見を提言として取りまとめたいと考えているところです。実質的には年内ということになろうかと思いますが、そういう時間運びで具体的なまとめを行っていくことになろうかと思っております。非常に限られた時間で、限られた材料から検討していくので厳しい面もありますが、どういった項目立てにしていくのか、具体的な整理も少しかけてみましたので、そのことも含めた議論になろうかと思っております。

委員の交代はほとんどございませんが、前松江北高校の校長先生、泉先生がご退職になりましたので、かわって小山先生にお入りをいただいたところでございます。島根県公立高校長協会の会長としてお入りいただきました。ただ、泉先生には、引き続き島根大学のアドミッションセンターの特任教授としてご着任ということでございますので、まさしく高大接続のところを担当されるということで、委員としてお残りいただいたらどうかと思っております。何

にせよ、この委員会は高校の在り方を検討する委員会で、私立のほうから大多和先生に出ていると思いますが、県立高校からは小山委員と泉委員とお2人加わるということには大変意味のあることなのではないかと考えておりますので、残留をお願いしたところもごさいます。引き続きまして、どうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

2 議 事

[資料1、2を事務局より説明]

<意見交換>

○肥後会長

高校入試改善の狙ひがこの改革によって実現されたかどうか、実現されてないとすれば何が課題なのか、その辺はまたご報告いただけるということで、よろしいか。

○事務局

次回以降の会議でお示しする。

○肥後会長

スポーツ特別選抜は良い制度だと思うが、合格者数が少ない。どういふ理由で少ないのか、教えていただきたい。

2点目は、一般選抜の状況について、4,200人の出願で200人近い欠席というのは、かなり大きな数だと考えるが、その理由別内訳について、教えていただきたい。

3点目、定員が割れているにもかかわらず全日制で135人が不合格になっている。大学入試では、募集定員以下しか受験していないのに落とすには特段の理由が要る。落とすにはいけないということでもないし、全員入れなさいということでももちろんないが、その辺の線引きをどうお考えなのか教えていただきたい。

4点目、志願状況を見て1回だけ変更して良いということだったが、その制度を有効に活用したのか、しなかったのか、その辺の理由は何かを教えていただきたい。理数科で一定程度そういうことが起きたのではないかと考えられる。その辺の動きについて、全体的に理数科が少し低迷しているようにも見えるので、理由も教えていただきたい。今後、理数科が必要かどうかということよりも、学力的にかなり大学進学を強く意識した、志向性を持つ学生をどう育てていけば良いかという議論にもかかわってくるので、ぜひそのあたりの分析を教えていただきたい。

○委員

推薦選抜の合格者数が全日で921人というのは、すごく多いと思うが、そもそも推薦入試を実施している学校としてない学校とあり、その推薦入試がどのような理由で必要な仕組みなのか、何を基準に推薦入試の合格を決めているのかを教えてください。

○事務局

推薦選抜については、各学校で定員の40%まで募集人員を定めることができる。ただし、大社高校の体育科だけは60%という数字を設けている。

選抜の内容については、多くの学校が、中学校からの個人調査報告書、それから面接。半分程度の学校で作文を課している。特徴的なところでは、隠岐島前高校が今年度から集団討議を取り入れている。合否については、各学校で選考基準を設け、合格者を決定している状況である。

○肥後会長

今、少し出たが、各高校で特色のある入試を行っているところも、あるかと思う。そのメリットを報告していただければ今後の参考にもなる。学びたいことと学校とのマッチングが今後必要になると思うので、その辺のデータがあれば教えてください。

○委員

単に知識や技能を問うのみではなく、思考力・判断力・表現力を問う問題をふやしたということだが、中学校の教職現場で混乱が出ていないか教えてください。

○事務局

思考力・判断力・表現力等を問う問題をふやしたが、180度変わるような入試学力検査問題の変更ではない。中学校現場で大きな混乱を生じさせたということはないと思う。

○委員

国の学力調査のB問題がすでに数年来実施されてきたので、どちらかという抵抗はなかったと感じている。

○委員

厚労省が発表した中学校教師の長時間労働のニュースを見たが、中学校の先生の残業時間が月93時間で、過労死レベルを超えていると報道されていた。その理由を見ると、脱ゆとり教育に変換したことによる影響もあるとのことだった。そういう状況の中で、さらにこういった制度が変わると、相当負担をかけることにならないか。高校とオーバーラップして考えると、視察の中で、島根の一番の魅力は何かと尋ねたときに、生徒一人一人ときちんと向き

合うことだという話があったが、そういったところとかけ離れていくのではないかと少し心配したところがある。

○肥後会長

大変難しい問題で、学習指導要領に指定されている学習内容そのものが大幅に減ったわけでもないのに、逆に思考力・判断力・表現力を求める、あるいは新しい学習指導要領では、一方通行で教えるよりもアクティブに学んでいく方法をとらなければならないとなっていて、現場の先生たちのご苦勞が新たな形でふえていくだろうということは容易に想像できる。

〔資料3を事務局より説明〕

<意見交換>

○肥後会長

統括プロデューサーとは、どういうイメージか。

○事務局

今まで、各高校には、魅力化コーディネーターが配置されていた。高校の魅力化コーディネーターは、基本的に、高校とその周辺地域の連携をサポートするために存在していた。今回、新たにその高校魅力化と一緒に、小・中学校も含めて、より広域に取り組む必要があるときに、高校の魅力化コーディネーター達とチームを組んで、市町村全体のそうした思いを結んでいくような者が必要であると考え、統括プロデューサーを配置した。

○委員

この高校魅力化推進事業の概要の文面は、前に読んだが、次代を担う若い世代の人たちに移住・定住の地として選択してもらうために教育を魅力化するというのは違うのではないか。教育の目的がそこにあるのか、少し憤りを感じる。しまね高校魅力化参考書2017の中に同じような文言があるが、そこには移住・定住の地として選択してもらうことにも寄与するとあり、これはそうだろうとは思う。教育と地域創生とが混在して、どちらがメインなのか全然見えてこない。これは問題ではないかと思う。

○事務局

教育の根幹は、教育基本法にあるとおり、そもそも人づくりにある。当然、教育を魅力化していくことの意味合いは、人づくりにある。我々は当然人づくりを目指してやっているので、イコール地方創生、移住のためと書いているが、そのベースにあるのは、当然教育を通じて人をつくっていくというものである。ただし、現状として、島根の子供たちが今、さま

さまざまな要因により県外に流出しているのので、例えばふるさと教育など、そういったものを積み重ねながら、地域に魅力を感じ、選んでもらえる地域にしていきたいと考えている。そのためには、子供たちにその地域における教育が当然魅力的であると感じてもらえなければいけない。このメッセージは、地方創生の言葉が非常に強くなっているが、我々としては、そのためにこそ教育を変えていく、よりよいものにしていくということを念頭に置いている。

○委員

この教育魅力化だが、実は松江市と出雲市が外れている、人口的にいうと55%のところは外れている。事業の中身を見ると、離島・中山間地域における教育の魅力化と出ているが、地域によっていろいろな魅力化があるのではないかと、論点整理の中でもそれが論議になるだろうと思うので、この「教育の魅力化」推進事業という位置、このタイトルも含めて、割り振りは、きちんと明確にしておく必要があるのではないかと感じた。

〔資料4を肥後会長より説明〕

<意見交換>

○委員

2点ほどお願いしたい。

1点目は移住・定住のところだが、基本的には親の世代のことで、子供の場合、移住・定住というのではないのではないかと。子供を持つ親、あるいは近い将来子供を持つ親が移住・定住を考えたときに、この島根が魅力化するというのも教育の魅力化の中にも含まれる、前提としてあるのではないかと思った。そういう観点からいうと、この教育の魅力化というのは、地元の生徒もだが、県外の生徒にとっての教育の魅力化ということもあると思う。人口減、少子化の中で今後のことを考えれば、島根に定住・移住する人を求めるというのは県全体としても考えなければいけないので、教育問題というのは大きいウエートを占めている。隠岐島前高校も結局、高校がなくなったら地元から人が逃げていくということが1つの大きな問題意識としてあったと思う。逆の観点でいえば、島根で子供を育てるのに良い環境があれば、Uターン、Iターンを含めて、そういうこともあるのではないかと。そこまでの発想がほかのところには、あまり書いてないが、この移住・定住をどのフレームで捉えているのか。

2点目が、教育の魅力化は、いわゆる離島・中山間地域に具体的な財政支援策として行い、運動論として島根県全体で考えると言われたが、その辺のところをもう少し詳しく考え方を聞かせていただきたい。

○肥後会長

最初の点については、私どもで議論すべきこともあるかもしれないが、教育長のメッセージの3ページには、「学校はもちろん教育の場であることが基本だが、いわば生き残りをかけて離島や中山間地では地方創生の取り組みを進めようとしている。その中では、今や学校の在り方は学校教育に閉じた自己完結的な発想のみで考えるのではない」と書かれている。

○委員

移住・定住とか魅力化というのは、目的ではなく、結果論だと思う。学校の魅力化も、魅力的な学校とか教育をつくれれば結果的に子供たちが帰ってきたいと考える。もちろん人生の選択の中で帰ってこない、移住しない子もいる。しかし、移住・定住を目的にしているわけではなく、目的にすると本末転倒になる。魅力的な地域になれば帰ってくる子もいるし、帰ってこなくてもかかわり続ける子もいる。結果の1つとしてあらわれてくるという関係性ではないか。あと、私も1つ思ったのが、この委員会を通じて、どういう子供を育てたいのかということを確認にして議論をしていったほうが良いと思し、その中で整理していくほうが、教育の魅力化についても見えてくるのではないかと思う。

○肥後会長

基本的にはやはり教育の議論で、子供の教育をこの県立高校でどのように行っていくかという議論が骨子なので、移住・定住を促進するというようなことを目的とした議論ではない、そういうフレームワークでの議論で良いのではないかという確認だったと思う。

2番目に提起いただいた点については、どうか。

○事務局

高校魅力化・活性化事業を6年間実施してきたが、本事業は総合戦略の中の、いわゆる中山間地域の活性化の取り組みとして位置づけ、事業を実施してきた。その位置づけは、引き続き維持しながら、予算要求し、今回の事業の成立となった。引き続き中山間地域・離島への支援という仕組みをつくっている。ただし、今回の教育魅力化の定義は、県内全域でその思いを共有していく必要があるのではないかという意味合いから、県教委としては、運動論という言い方をしている。そういった思いを予算化できなかった心苦しい部分もあるが、そういった思いはぜひ共有しながら取り組んでいきたいと考えている。

○委員

魅力的な地域とか教育というのは、生徒にとっての魅力を考えると、地域だったり学校だったり、地域に暮らす一人一人の大人自身が魅力的でないとならば多分実現しない。そういう意味

で魅力化を実現していこうと思うと、私たち大人一人一人が実際に理解し、一緒にやっていないといけない。そういう意味において、運動論になっていると受けとめている。

結局、予算上の枠組みはどうしてもそうなるとは思いますが、離島や中山間地域だけの話では本当はない。魅力とか地域を愛せみたいなことを子供に強要するのではなく、大人と一緒にあって魅力的な地域とか愛せるような地域をつくる、そういうことが、言葉で言うと運動論になると私は受けとめた。

○委員

学校の規模、システム、プログラムとか、そういったことが関わってくるが、それをオペレートする主体は教員である。教員という言葉が全然出てこないが、教員をどう育てるのか。なかなか難しいが、人事を含めてどう配置するか、どう採用するか、どう研修するか、そのあたりを加えていかないと、なかなか実現するのは難しく、ミッションがふえて教員がパンクするということが起こりかねない。

もう一つ嫌な話をするが、従来型の学力の保障ということはやはり必要だと思う。それが、こういった取り組みとどうリンクしていくのか。私は地域課題研究とかPBL型のことをやれば、学ぶ意欲が高まって学力が伸びるだろうという仮説を持っており、県民の関心事でもあるので、何か織り込めないか。

○肥後会長

今おっしゃった1点目は、地域社会参画型の学校運営をやっていきたいと考えたときには、例えばそのための教員の育成あるいは研修システム、そのための配置ということが当然あるわけで、それをどうしていくかという問題にかかわってくる。

2点目について、従来型の学力という言い方をされたが、ほかに良い言葉がないか。どんなに文部科学省が学習指導要領を改訂しても、学習内容が決まっているという意味において、高校教育の7割から8割方はこれまでどおりである。その辺をどうするかという問題は、すごく大事なことではある。

例えば、隠岐島前高校を中心に、さまざまな地域課題解決型の授業を行っているが、結局のところ、例えば公営塾をつくって従来型の学力を保障している。どんなに工夫された授業でも、それは総合的な学習の時間の中の週に1コマあるかないかという時間数であることを考えると、その残りのコマの在り方については何も言わないのか。本当は、そこを崩してまで次のところに行くのか、行かないのかというところは結構大きな課題である。それは大学が今後どういう入試をするかということにも、もちろんかかっているが、そのところが様

子見なものだから、従来型は従来型でやっておくという話になるし、新しいのは新しいのでやれということになると、教員がパンクするという話になる。

○委員

今のお話は、いわゆる学力の3要素の一番上の十分な知識・技能というところで、無理に新しい言葉をつくるよりも、学力の3要素の1番目は3本柱のまずベースという位置づけで良いのではないか。

○肥後会長

いわゆる教科学力と、ジェネリックスキルが同じか違うかという話になる。

今回の学習指導要領の1つの特色は、例えば数学は数学の得点が上がるということを目標にしていないということのある意味では言っているところが大事なところ。数学の得点、偏差値が高くなることを、必ずしも今度の学習指導要領は重視していないように見えるということを申し上げておきたい。つまり、数学、化学、物理学、国語にしる、それがあべき基礎的知識・技能のどこに結びついたか。教科の学力（得点や偏差値）が高いことが、たとえば思考力や判断力や説明力、あるいは人と協調的にコミュニケーションをとる力などのジェネリックスキルに結びついていき、将来にわたって続いていくような「学びの姿」が育っていくことにきちんと結びついていることが重視されている。そこに留意しなければならない。

○委員

今後まとめていく上で大事な論点で、この委員会として、人口減少時代、今社会が変化している中で、島根県でどういう子供たちを育てていくのか、それをどういう表現にするのかということはすごく大事である。

○肥後会長

今私たちがしている議論は、教科学力を保障するとか大学の偏差値を上げるとか、それは大事だとかそういう議論をしているのではなくて、高い学力とは何かということを議論していると私は考えたい。高校生に求められる高い学力とは何か。それは、1つの次元には多分置くことができない。1つの物差しの上に並べていくことはできなくて、一定の広がりのある議論なのではないかと思う。ただし、それをすごく角度を狭く追い込んでいくと教科学力ということになるし、それが大学入試センター試験の得点ということになると思う。もう少し広く高校生に求められる高い学力とは何か、その高い学力をどの子にも保障していくためにはどうしたら良いかという議論をしていきたい。

○委員

学力テストの結果から見ると、全国平均を下回っているという現状はあるわけで、それはなぜそうなのか、高いところはなぜそうなっているのか、分析する必要があると思う。少なくとも平均点、そこがやっぱり基礎的な学力であって、平均点を下回るようでは、今後社会に出ていろいろなことにチャレンジしていく中で、障害になる部分があると思うので、高校では、ここまでは最低限身につけておかなければならないというところの底上げをしていくことが最も基本的なことだと思う。

○委員

3点。1点目は、社会への出口に近い高等学校という視点で、社会から求められていることと、子供自身が希望する進路のマッチング、その部分をどう考えていくのか。地域の方たちの意見も聞いて、このあたりのマッチングができる仕組みをつくることを考えていきたい。

2点目、保護者としても、学校現場、教員の負担というのが大変気になっている。教育現場、先生方の負担を少しでも取り除く。子供たちが健康でハッピーであるためには、夢をかなえるためには、一番身近にいる先生が心身ともに健康であることがとても大事なことだと思う。

3点目、バランス。ICT教育、グローバル化等、時代に応じた知識の取得も必要となるが、知識だけではなく、“辛抱”などの心の強さや、柔軟さを身につけることができる教育を保護者としては望んでいる。子供たちが自分らしくいられるために、その個性を伸ばし、自分自身で選択していく力を身につけてほしいと思う。

○委員

先ほど高校入試が新しくなったということだったが、次回以降のところでは中学校、高校等の検証結果を報告していただくという話だったが、高校入試に限らず、中高それぞれの教員、生徒の意見、実態を把握することが必要ではないか。

○委員

先ほど残りのコマをどうするかという話があった中で、ここの論点というのは、高校の授業の中でどのくらいの割合のことを私たちはイメージをして考えているのか。実は全体をイメージして話をしていたつもりが、もしかすると一部分のことではしかないのではないか。そうするとやはり、先ほど従来型の学力という話があったが、高校の学習の全体を捉えながら考えることも必要ではないか。随分前に論点で出てきたが、魅力化、特色化という言葉の中ですごく狭い小さなところに、もしかしたら入り込んでいるのではないか。先ほどバランス

と言われたが、そういう意味で、全体と部分ということをもう一度押さえておく必要があると思った。

もう一点は、アドミッション・ポリシー。前回、島根中央高校での話の中で、生徒募集に出かけたときに、「あなたの高校ではどういう子を育ててくれるのですか、その説明をしてほしい」と言われて、自分たちの高校の魅力は何だろう、自分たちができることは何だろうということをとて真剣に考えたと言われたことが大変記憶に残っている。そういう意味で、それぞれの県立高校がうちはこれなのだというものを、やはりもっと持たなくてはいけない。

また話が戻るが、少人数のメリットとか丁寧さとか、そこにしかないとか、とても丁寧なことも大事だが、もっとダイナミックな、たくましさとか切磋琢磨とか、そういった反対の立場の視点も持って考えることも大切である。

○委員

この会に参加する前に、隠岐高校で話をする場があり、隠岐高校に求めるものは何か、魅力のある高校とはどういうことだかと思うかという質問があった。私自身は、やはり自分の地域の学校で自分の夢をかなえることができるということ、夢を追っていけるということ、私はそれが一番に浮かんだ。自分の高校時代、自分たちが経験した高校教育がイメージの中にあって、自分はこういう職業につきたい、ではこういう大学に行きたいとか、そこら辺がきつと基盤にあったからだと思うが、コーディネーターが説明される魅力化の話をそのときもいろいろ聞いたが、それがどう進路保障にどうつながっていくのかというところがぴんときないままに数時間を過ごした記憶がある。

この会に1年参加して、いろいろな学校の具体的な取り組みや、生徒やかかわっている方の話を聞く中で、高校教育が新しい方向に向かっていること、魅力化というのはこういうことかということが少しずつわかってきた。その中で育つものとか、その地域がそこに期待をしているところとか、いろいろなところが見えてきて、すごく大事なことだと思っている。隠岐高校、隠岐島前高校、また隠岐水産高校にも、この先期待するところはあるが、やはり地域格差もあり、学力の差が、もし具体的な形で示せるのであれば、そこら辺も同時にクローズアップして見ていきたい。

先生方の取り組みとして、魅力化を進めていく上で、地域出身の先生とかその地域に思いを持った先生がどれだけいるかということも、大きなポイントだと感じるのが何度かあった。そういった教員採用のシステムとか、各地域で教員志望の子供をどれだけ育てていけるか、採用枠など変えていけないか。

○委員

先ほど総合的学習の時間、いわゆる週1時間という話があったが、今、島大の3回生になっていると思うが、この生徒は隠岐の民謡が得意だったので、小学生に隠岐の民謡を教えていた。12月から大体2月の終わりぐらいまでの間、授業とは関係なしに教えていた。その生徒は一体なぜそんなことをやったのかというと、隠岐に帰って音楽の教員になりたい、だから教えていた。本当は、長期休暇中にできないかと思ったが、長期休暇中には、小学生もいないからできないということだった。

また、隠岐高校から、3年続けて国公立の医学部医学科に進学したことがあった。これは地域から医師を育ててほしいという要望があり、そのためにいろいろなことをした。ご存じのとおり産婦人科医が少なく、地域から医師を育てる必要があったので、そういったことに取り組んだこともあった。

○肥後会長

議論のときに何をイメージするかという問題が大きい。この中だけで議論していると一定の方向性があるようにも思うが、現実に戻ると、ある意味ではあまり現実的ではない議論をしても仕方がないという考え方もあるかもしれない。学びの成果をどう示すかという話の帰着点が、結局、何大学に何人入りましたという話をするのか、それとも、そのことはあっても良いが、もう少し別のことも考えたほうが良いのではないかという、そのあたりのイメージは少し検討しなければいけない。大学入試が変わっても、各大学の序列と価値は変わらないと皆さんが考えるのか、考えないのか。そのことはすごく大事なことではないかと思う。

問題は、大学に入ることでなく、出た後にその子がどういう人生を歩むかということであり、そこへ向かって、私はできれば議論したい。

○委員

先ほど言われた、学びの成果の示し方、見える化について興味があるが、今、方向として大学入試のことがずっと出てきている。しかし、高校生の実態として、大学に進む生徒、すぐ社会に出ていく生徒、そういった層がある中で、すぐ社会に出る生徒たちにつけるべき力ということも考えていく必要があるのではないか。

○委員

今後の議論で、どういう生徒を育てていきたいかという議論する上でギャップがあると感じたのが、教育関係者にとっての高校の役割、教育関係者には多分見えていると思うが、一般から参加している者からすると、すごくごっちゃになっている。どういう学力をつけたい、

育てたいというのと一緒に、その中で高校はどういう役割を担うのかについて明確にしないと、議論が散漫になる。そこがぴんとくるようでこないの、そこは整理したほうが今後の議論が進めやすいと感じた。

○委員

生徒も含めた松江とか出雲の普通高校の実態がよく分からない。先端的な科学技術、ICT化、グローバル化等にどのように対応しているのか、アドミッション・ポリシーをどのように設定しているのか実態が分からないので、学校に行くのは難しいかもしれないが、一端を聞かせていただきたい。

3 閉会あいさつ（片寄教育監）

委員の皆様方におかれましては、昨年度から引き続き、本日はまた長時間のご審議ありがとうございました。

次回のご案内の日が本年度の島根県高校総体の日程と重なっていますことを、まず高校関係者の皆様方にはおわび申し上げます。

少し前に、松江北高の生徒が熊本地震に対する支援金を集めてどうこうという記事が載っておりました。それから、島根県には大阪に学生会館というのがありまして、島根県出身の大阪近辺の大学、短大、専門学校に通っている生徒たちが生活しています。そのホームページを見ると、学生たちが自主的にいろいろな活動をしておりますし、高校での学びをさらに発展させるための学びの場をみずから求めて、様々な活動に取り組んでいます。機会がありましたら、そういったホームページもごらんいただきますと良いかなと思っております。

子供たちは間違いなく成長していると思っております。その成長をさらに進化させるためにどうしたら良いかということ、委員の皆様方には幅広くご議論いただいていると承知しております。本年の末には提言をいただけるということでございますが、肥後会長様を中心に、議論をまとめるのもなかなか難しいようにも思いますが、そこら辺、ぜひよろしく願いたいと思っております。

本日は、長時間まことにありがとうございました。また、引き続きよろしく願います。